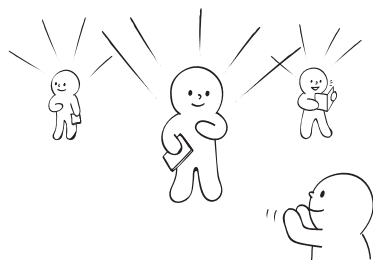


学びの主人公

一人ひとりが、
学び続ける人生の主人公である。



主体的に学ぶ力を身につけてほしい。

▼その状況において

先生が話すことや仕掛けることを授業の中心に据えてしまうと、生徒は先生が何かをしてくれるのを待つようになってしまう。たしかに教師は、学校全体の状況や到達すべき目標を知っており、それらを踏まえて授業を提供しなくてはならないため、常に責任を抱えている。しかし、わかりやすく解説したり、魅力的な体験を提供しようと工夫してつくり込んだりすればするほど、結果として教室での主導権を握ることになりやすい。こうして、「提供する先生」と「それを受ける生徒」という関係ができあがり、生徒たちは受動的になってしまう。

▼そこで

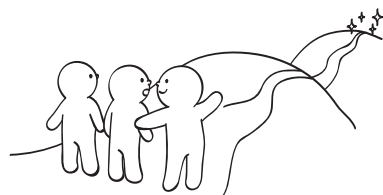
生徒それぞれが自分で気づき、考え、行動することを誘発する授業をする。まず、自分の授業で生徒にしてみたい経験、得てみたい気づきを決める。そして、それを授業の目的として設定し、生徒にその体験が起こるように授業を進めていく。生徒に積んでもらいたい経験はたくさんあるが、そのなかでも今のようなことが有効なのか、またそのためにどのように授業・課題をつくっていけばよいのかについては、この Active Learning Patterns を参考にしたり、他の教師たちとアイデアや事例の情報交換をしたりすることで、見つけていくことができる。

▼その結果

生徒たちは、まさに自分こそが学びの主体であるという意識をもつことで、主体的に学びに取り組む意味を知ることができる。この変化は最初はわずかなものかもしれないが、それらが生徒同士で共鳴し合い、高め合うことで、全体として学びに対する姿勢とムードが変わり、生きる力を主体的に身につけていくコミュニティをつくることにつながる。

同じ側に立つ

向き合う関係ではなく、
ともに進み、サポートするという関係性。



主体的に学ぶ力を身につけてほしい。

▼その状況において

先生が正解を知っていると思うと、生徒は自分の頭で考えて答えにたどり着くのではなく、最終的に正解を教えてもらえんと思ってしまふ。教師は、日々「教える」ことのなかで、正解を持ち、それで答え合わせをするということに慣れてしまいがちである。また、効率よく学んでほしいと思うあまりに、生徒が間違っているときに本人が自分で気づく前に指摘したり、間違いそうなことを先回りして教えてしまったりすることもある。しかし、そのようにいつも「正解」を提示してくれる人がいると、生徒は自分で少し考えてわからないときには教えてもらえんと思ってしまふ、本気で考えるという習慣をもたなくなってしまう。

▼そこで

生徒がこれから出会う知識や機会に対して、同じ側に立って一緒に答えに向かって模索していく気持ちで、授業を行う。教師を、生徒に対して正解を提示する立場と捉えるのではなく、生徒と同じ側において、その生徒が探りながら答えにたどり着く過程を手助けする役割をもつと捉える。例えば、答えや解き方を聞かれたときには、単に正解を教えるのではなく、「なぜそうなるんだろうね」などと考えさせるための問いかけをするとよい。生徒が間違っていることに気づいたときには、間違っていることを指摘するのではなく、生徒の思考と一緒にもう一度辿り、矛盾や問題を本人が気づくようにする。

▼その結果

誰かから正解を聞くという態度ではなく、自分で考え、答えを見出していく経験を重ねることができる。そのプロセスを経験すると、わからないことに出会ったときも、自分で考えて乗り越えていけるようになる。教師も、「教科の内容を正確に教える役割」から少し離れることができ、生徒の理解や視点、興味にそった知識を柔軟に提供することができるようになる。

未来への広がり

時間を経て効果が表れる学び
も大切にする。



これからの社会を生きるための本質的な力を身につけてほしい。

▼その状況において

目の前に迫る受験やテストなどで結果を出すことに重点を置かざるを得ない状況では、それ以外の、効果がでるまでに時間がかかるような力の育成がおろそかになってしまう。ある一定の学力をつけることへの責任や、受験の存在、また保護者の期待などを考えると、テストの点数や偏差値などを軽視することはできないものである。また、教師の側としても、生徒が知識を得たり成長したりする手ごたえがないと不安に感じ、比較的短い期間で効果が見られる方へと意識がいつてしまいがちである。

▼そこで

後々に生きてくる重要な力をしっかりと見定め、その重要性を生徒や保護者に説明・共有し、授業や評価のなかに織り込んでいく。テストなどで、ある時点の知識習得状況を確認するだけでなく、考え方や取り組む姿勢、学び方、意思決定など、長い時間を経てじわじわと効果を表すような力にも着目し、その伸びを評価する。目に見えにくい力なので、それを間接的にでも把握できる活動・出題を行い、定期的に確認して変化を把握できるようにする。またその評価軸を一律で定めず、生徒一人ひとりの特徴や得意なことなども踏まえて、個々の変化を見るのもよい。

▼その結果

学びの効果が発揮されるにはいくつかの時間幅があると意識することで、短期的な数字には表れない力の育成に対しても自信をもって取り組むことができる。それらは、学びに対する本質的な土台となるので、徐々に数値で表れるような学力についてもポジティブな影響が出てくるだろう。また、そのように長期的に効いてくる本質的な力が評価の対象となることで、生徒も、単に知識を得るだけでなく、未来を見据えて学ぶ力を養うことに目が向き、積極的になっていく。

先生語録

せんせいごろう

A. 学びたい心を見つけ、育てる

生徒を中心にする

A1 学びの主人公



▷ “前に黒板があるといういつもの教室で、板書するといういつものスタイルは、気持ちいいですね。自分が主人公だから。生徒は自分の言うとおりにやってくれるし。でもそれって、本当は生徒が主人公のはずなんですけど、教員が主人公になってしまっていると思うんです。”

▷ “昔の授業スタイル、先生が話して、生徒が聞いて、ノートをとるっていう昔の授業だと、何が起きているか。1つ考えられるのは、全員ではないですけど、大半の生徒はその授業中は、手を動かしてるだけで頭を働かせてない。一生懸命書いているけど、僕らが言っていることを理解しようとはしていない。だったらそんな授業しない方がいいかなって僕は思っちゃいます。”

▷ “数学の教員がよく言うのは「え、俺らアクティブ・ラーニングしてるよ。」「だって問題解いてんじゃん。アクティブじゃん」と。それはアクションは確かに伴ってるけど、それだけだとどうなのかなというところはありますよね。もし、解いてるというより解かされてるなら、それはぜんぜん主体的じゃないじゃない。”

▷ “英語なのに生徒がほとんど喋らない授業があるんです。その先生に聞くと「自分は全力投球している」と。「でも先生、野球でも直球ばかりだと生徒はくたびれるでしょ」というと、「私はくたくたです。でも、それがいいんです。それが無いと仕事した気にならないんです。」

って。ほんとに、ちょっとそういう部分があって、しゃべらないって、サボってダメなんじゃないかって思わせるような、悪しき習慣がある。他にも、「アクティブ・ラーニングっぽいのに慣れると、寂しくなった」って言われたことがあります。生徒が自分に関わってこなくて、自分達でやるから。自分の存在感を、生徒に何かを言うことで得ている。そういうことを乗り越えないとね。自分が脇役になって、おいしいところを言わずに我慢できるかどうかです。おいしいところを言う気持ちいいんですよ。「ほらすごいだろう。」となりますから。”

▷ “僕は他の先生にも自分にも、生徒たちがどうなっている状態を目指しているのかって問いかけることが多いですね。そうしないと、パッチワークみたいな授業が並んで、結局生徒はどうなったんでしたっけって考えてみたら、みんな「……」みたいなことが起こってしまう。これは別に新人に限らずあります。これを考えてみると、みんなハツとして、数学の授業を通してどんな生徒を育てるんですか、そうしたら授業の設計や課題ってどうすればいいんでしたっけって話になる。”

▷ “教員が常に生徒の上において、自分の持っている知識を効率よく生徒に伝えるというのをやっていたのが、今までの高校の形だったような気がするんです。でももう、例えば情報に関する知識なんてはかに生徒が持っているの。それを使って起業しようかというようなことになったら、我々が何も教えられないんです。だから、その上から下という意識を取っ払ってしまわないと、生徒から意表をついた意見が出てきた時に、それはダメよとシャットダウンしちゃうことになる。それを採り上げて、これってもしかしたらこういう使い方が出来るかもしれないとコーディネートしていけるのかという所が、これからの教員に必要な力量なのかなと思うんですよね。”

A2 同じ側に立つ



▷ “例えば探究的なことをやっていると、想定もしないような答えがポーンと出てきて「面白い！」っていうことがよくあるわけじゃないですか。そこで我々も一緒に感動して、「すごい！その発想はなかった！」「確かに俺も知らないぞ、一緒に調べてみようぜ。」とか言って、一緒にやる感覚は多分すごく大事です。教えるよりも、一緒に学ぶ感覚。物の見方とか調べ方とかは僕の方が知っているからそこは教えてあげられるけど、知識はインターネットが繋がっていると、そこは大きな差が無いから。知識よりも、調べ方とか物の見方とか、そこは教えられるから一緒にやりましょう、という感じです。”

▷ “理科で言うと、入り方が逆になります。解説が先じゃなくて、まずは事象を見せて、それについて思うことを語って、それを合わせていく。それを解説型でやると、生徒は何にも面白くない。実験をする前に解説で答えを言っているから、「これで酸素ができるだろう。」と確認しても、「あ、そう。」っていう話しかできない。わくわくしないでしょ。”

▷ “理科・数学でも、子供が自然に思ったことが正しいとは限らないんだけど、それは大事にしてあげないと、主体的な学びにはつながらない。誤った過程を生徒が言ったら、一度その子の論に立って、どんどんと一緒に発展させるのに付き合おうと、どこかで破綻して本人が気づきます。そこは先生達が言わないようにしないとね。他の生徒が「それ違うんじゃないか？」と聞いて、「あ、そうか。」みたいなのは、本人にとっては発見です。先生は既に間違いが出た時から分かっているけど、やっぱりそういう配慮をしてあげないといけないなと思っていますね。結局どう考えても、そっちの方が深い理解になるんですよ。子供たちがあたかも発見したようにしないとね。解説したら駄目。”

▷ “生徒が「猫は甘みを感じないと言うんですけど、それはなんでですか」って言うんです。そんなときは、それを生徒と一緒に考える。科学的な違いは、味蕾の違いだと思うんですよね。要は、その甘味受容体が無い。でも、そうなった生物学的理由が何かあるはずなんですよ。それを、生徒と一緒に、猫って何を食っているかね、と話をして、猫は甘い物を食っているかなと考えていく。

すると、「あ、猫は肉食ですね」となり、「肉食って、甘み必要ないですよ」と。そして甘くないのにエネルギー源に出来るのはなぜかという所で、また、代謝の話までできて。で、私たちが甘い物を感じるのはなぜかというと、霊長類って果物を食べるようになって、その時に今その甘みと言っているものの方が、より自分がエネルギー源を取れるとわかって。と、そこら辺が関わってくる。もちろん、私も、答えなんか知らないですよ。てか、神様も知らないんですけど、そう考えると辻褄が合うよねというのを、生徒と一緒に考えてみるんです。でも、大切なのは、最初からぶわっとそれを言う訳じゃないんです。そんなことを考えながら、「猫って、何食ってるかな」、「肉ってどういう味かな」って振りながら、生徒が、「あ、じゃあ、先生、それってこういう事ですか？」となるように話していきますね。”



A3 未来への広がり

▷ “生徒のために僕はいると思ってるので、将来生徒たちがよりよく生きてほしいなって思っています。だから僕の授業のなかで、生徒たちが将来よりよく生きられるようなスキルとか、力とか、態度とか身につけてほしいなというふうに思うんですよ。”

▷ “最終的には、生徒がそれぞれに、自分の豊かさに気づけばいいって思っているんです。”

その気付き方についての色々な方法を伝えていると思います。スキルとしてもそうですし、気持ちのあり方というか、**マインドもそれに向き合うような場面をつくる**ということですね。あとは、それを磨いていく磨き方みたいなものもあるのかなあって。で、その中で、自分が何に対して…っていうのを築いていってくれたらと。それは多分変わってもいいものなので、だからこそ向き合い方というか気づき方を大事にしているかもしれない。やっぱり**感情ってシグナルだから大事なものだ**よね。泣くんじゃねえ！とかってよく言われるけど、いやいやそこは多分大事なんじゃないかなとか。怒ったときは、怒る奥に何かあると思っていて。そこに気づくためのシグナルだから、感情も出していいし、と。”

▷ “小学校とコラボして、共同の授業をしてるんですよね。普通そういうの、しないじゃないですか。でもよくよく考えると、同じ学年の同じ年代の子たちの中でのコミュニケーションしか学校にないって、おかしいよねって。**社会に出たら色々な年代の人がいるのに**。そういうような、今のこの状態って大丈夫なのって、**本当は社会に出たらどうなのっていう視点から見て**、何か面白いこと、必要なことができないかなって考えています。”

▷ “コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースに変わってきているのですね。今までは粘り強さとか、何ができるかということカリキュラムのなかで育ててきた。それがね、今コンピテンシー・ベースのワークショップなんかは、まさにコンピテンシー・ベースのルーブリックに替わってきて。じゃあ、それが評価なり評定では、どうやっていけばいいのかということです。個人的に思うのは、プライベートな学びからパブリックの学びに変わっていくべきで、だから共同作業が要るんだということです。ディスカッションや対話をして、**正解が出ればいい**というのではなくて、**新しい疑問がね、生まれればいい**んです。おそらく会社に入るとそういうことがすごく大事なんだけど、学校で新しい疑問が生まれたから君はAをあげようなんて評

価ができないんですよ。でもそれってとっても大事で、見なくてはいけないことです。”